

2016

第14回 群馬県図書館大会報告書



平成28年11月24日(木)

会場：群馬県立図書館

目次

全体報告.....	1
記念講演	
「生き残る図書館、消える図書館」(猪谷 千香)	4
第1分科会報告	
「アクティブ・ラーニングを知り、そして考える」	6
第2分科会報告	
「図書館の魅力と可能性を伝える 一図書館員のためのPR実践講座一」	11
参加者の声.....	15

※ 講師等の発言は、大会当日1回限りを前提とした発言内容を事務局及び分科会検討会で要約したものです。転載・2次利用は固くお断りいたします。

1 全 体 報 告

事業名	第14回 群馬県図書館大会
日時	平成28年11月24日(木) 10:00~16:30
会場	群馬県立図書館・前橋商工会議所
主催	群馬県図書館協会(群馬県立図書館、群馬県公共図書館協議会、群馬県大学図書館協議会、群馬県高等学校教育研究会図書館部会、群馬県小中学校教育研究会学校図書館部会)
後援	群馬県教育委員会
大会テーマ	未来につなげる図書館 - 飛躍・変革のとき -
日程 ・ 内容	<p>1 式典(10:00~10:30)(群馬県立図書館 ホール)</p> <p>(1)主催者挨拶 群馬県図書館協会 会長 中山 勝文</p> <p>(2)来賓祝辞 群馬県教育委員会 教育長(代理) 佐藤 喜治(教育次長)</p> <p>(3)後援・加盟団体紹介</p> <p>群馬県教育委員会生涯学習課 課長 下田 明英 群馬県公共図書館協議会 会長 橋本 吉弘 (太田市立中央図書館 館長)</p> <p>群馬県大学図書館協議会 会長 田中 麻里 (群馬大学 教授)</p> <p>群馬県高等学校教育研究会図書館部会 部会長 齋藤 正章 (群馬県立新田暁高等学校 校長)</p> <p>群馬県小中学校教育研究会学校図書館部会 部会長 松島 一利(欠) (前橋市立上川淵小学校 校長)</p> <p>(4)表彰式</p> <p>①優良図書館群馬県教育委員会表彰 富岡市立図書館</p> <p>②群馬県読み聞かせボランティア顕彰 粕川小学校 さくらんぼの会 館林市立第六小学校読み聞かせボランティア よみうさぎ 乗附公民館図書ボランティア ユウカリの会(欠)</p> <p>③優良読書グループ表彰受賞グループ 高崎市立中央図書館 高崎読書会(高崎市)</p> <p>④全国公共図書館協議会表彰 橋本 文雄(元・千代田町立山屋記念図書館長)(欠)</p>



(富岡市立図書館)



(粕川小学校 さくらんぼの会)



(館林市立第六小学校読み聞かせ
ボランティア よみうさぎ)



(乗附公民館図書ボランティア)



(お父さんの読み聞かせボランティアグループ
かたつむりの会)



(高崎市立中央図書館 高崎読書会)



(橋本 文雄<代理受彰>)

日 程
・
内 容

第14回群馬県図書館大会記念講演（概要）

「生き残る図書館、消える図書館」 猪谷 千香

最近どうして多様な図書館が出てきているかという色々な制度や状況や図書館員の意識とかが、2000年代になって変わってきた。それが今になって開花してきた。

最初に大きかったのは小泉内閣の構造改革である。図書館長は司書でなくても良いと色々な図書館に関する法律が変わったり、指定管理者制度の導入があったりした。また、中教審の答申により、今まで図書館は教育委員会に属さなければならなかったが、市長部局でもできるようになった。図書館を核にして街づくりをやろうとしている自治体は教育委員会から移管してやっている。

それから図書館員の意識の変化。菅谷明子氏著の『未来をつくる図書館』（岩波新書）このインパクトが非常に大きかった。この本がきっかけになって日本でも同じようにできないかと動きだし、無料貸本屋から課題解決型図書館へ方針転換があった。各地に鳥取県立図書館をはじめとするビジネス支援図書館と呼ばれるようなものができてきた。

一方で利用者のニーズを聞いているうちに図書館のサービスもどんどん多様化していった。

今、日本は、人類が体験したことのないスピードで少子高齢化に突入している。それを緩やかにしていくのが、地方創生である。増田寛也氏著の『地方消滅』によればこのまま東京の一極集中と少子化が進めば、2050年位には900くらいの自治体が消滅するということで衝撃的なレポートだった。

住民の側の抱えている問題も顕在してきた。自治体の財政が厳しくなり、様々な課題に対応することができなくなってきた。そこで出てきたのが、その地域のコミュニティを使ってなんとかしていこうという流れである。その流れの中で図書館が注目を集めている。

東京都武蔵野プレイスは行政課題を解決する複合的な施設を作ろうということで出来た。図書館、市民活動支援、生涯学習支援（講座）、青少年活動支援が行われており、22時まで開館している。特に人気なのが、ティーンズスタジオである。20歳以下が利用可能で、ここには、ホルダリングやダンススタジオ、クッキングスタジオ、クラフトスタジオがあり、若者向けの本が置いてある。入場者数も右肩上がりが増えすぎて困っている。図書館にありがちな静かにしなければいけない、ジュースが飲めなかったりというようなことがこの施設にはない。放課後集まって自分の好きな活動ができる。そこが人気の秘訣。

複合施設化の流れでいくと富山市立図書館。施設には図書館の他、ガラス専門の美術館と富山第一銀行が入っている。共用部にはカフェやミュージアムショップがある。図書館にもガラスの作品が展示してあり、図書館と美術館の垣根が低く、楽しい造りになっている。図書館にはガラス美術に関する資料が集められているが、これが、閲覧モードで美術館に持ち込めるところがユニーク。

集客施設化する図書館だと神奈川県海老名市立中央図書館。ツタヤ図書館（カルチャーコンビニエンスクラブ（CCC））が武雄市立図書館を皮切りに全国の図書館に関わるようになった。何故、全国に受け入れられているのか。それは、ツタヤ図書館を誘致して駅前開発、集客の起爆剤としたいと考えているからである。しかし、色々な問題が出てきている。武雄市の選書問題等運営のつたなさが目立った。

青森のつがる市立図書館は、イオンモールが図書館を誘致した例である。商業施設と図書館のコラボレーションであり、他にも東京の世田谷区は、二子玉川ショッピングセンター内に予約資料の貸出と返却だけできるカウンターを作った。世田谷区は広く人口も多いため、あちこちに図書館を作らなければいけないが、都心なので地価も高いため、こういった商業施設内にカウンターのみを置いている。

伊万里市民図書館は武雄市立図書館の隣にあり、子供に本を読ませたいお母さん等市民の要望活動から建設された図書館である。設計段階から市民とのヒアリングを重ね、どういう使い方をするか綿密に打合せをした。開館して20年経つが、今でも市民ボランティアが400人くらい活躍している。図書館の入口にソファとテレビがあるのだが、これが、市民の憩いの場、人生相談等、人が繋がる場所になっている。

富山県舟橋村は、日本で一番面積が小さい自治体だが、人口増加率が県内で一番である。こちらの図書館は駅舎と一体になっており、通勤、通学の人に便利でよく利用されている。2013年には住民1人



あたりの貸出数が33.6冊と日本一になっている。何の変哲もない図書館だが、すごいなと思ったのは、館長以下職員全員が利用者の顔と名前を覚えている。おはなし会の朗読は、村長や議員も行っている。数年前にカモシカが図書館内に乱入し、話題になった。せっかくなのでカモシカの来る図書館として絵本まで出した。

岡山県の瀬戸内市民図書館は今年6月にオープンした図書館。元々、瀬戸内市は色々な自治体が合併してできた自治体であるが、図書館行政が弱体化し、核になる図書館がない状態が続いていた。そこで、新たに作ろうとした時に指定管理者ではなく、直営でやろうと市長が決断した。ユニークだったのは市民とワークショップをよく開催した。設計にはそれらの声も反映され、中高生向けの学習室も完備し、郷土資料館も併設。カフェのスペースもある。地元にはゆかりのあるデザイナーを起用し、すごくデザインがいい。おしゃれなトートバックも作った。売上金は図書館の運営費用に充てられる。

図書館の役割は期待もされているし、拡大されている。図書館は職員だけではなく、役場側の思惑、市民の思惑、この3つがうまく組み合わさって出来ている。大体、キーワードをみているとまちづくり、地域の活性化、地域コミュニティの場ということが出てくる。

自治体が厳しい状況になってきて、そうした中で図書館をどうしていくのか。施設を複合化して地方創生の起爆剤としたいというところが増えてきている。事例としては、まずはじめに島根県の海士町があげられる。財政が非常に厳しく、破綻寸前の状態だったのをアイターのアイデアで隠岐牛のブランド化や海産物の出荷改善等を行い、町の所得を増やした。図書館はもともとなかったが、司書をアイターで採用し、図書館活動を開始した。2010年には念願の図書館が公民館の中に完成した。この図書館があるから移住を決めたという人がいる位、素敵な図書館である。町内にはカフェがないため、図書館内にカフェコーナーを作り、セルフでコーヒー一杯で50円寄付という形をとっている。ここがあるので、色々な人が図書館に立ち寄って本を借りていくという生活の一部になっている。色々なイベントを行っていて、昔からの住民とアイターの人をつなぐコミュニティの場となっている。

岩手県紫波町は食料自給率が170%と豊かなところであったが、図書館もなければお金もなかった。前の町長が一念発起してオガールプロジェクトを起こした。オガールは地元のことばで”おがる”＝成長するからきている。4棟のうち1棟が図書館が入るオガールプラザとなっていて、公民連携の珍しい建物となっている。設計は外部のプロ集団が行い、海外の先進地事例を参考にした。図書館の中で黙って待っていては、人は来ない。いかに色々な人のライフスタイルの中に図書館という存在感を出していくかということでは好例だと思う。紫波町の面白いところはただ自治体が突っ走っているだけではなく、市民も相当参加している。ワークショップをたくさんやっていて、町長自らが「ぶつかれ(壊れた)テーブルオーダー」と言ったように100回以上やられたそうである。

本日の演題、「生き残る図書館、消える図書館」ということで厳しいことを申し上げると、記憶に新しいのは神奈川県立図書館問題がある。2012年神奈川県が財政がひっ迫していて、図書館サービスの縮減ということになった。川崎にある県立図書館は廃止。横浜の県立図書館に集約して、閲覧、貸出は禁止するというものだった。神奈川には別に横浜市立図書館、川崎市立図書館があり、入場者数もこちらの方が桁違いに多かった。また、市民の中で県立図書館と市立図書館の役割分担が明確でなかった。そんな折、神奈川県立図書館を考える会や企業が中心になって、ロビー活動やシンポジウム、バックヤードツアー等を開催した。その後、地元新聞がこの問題を取り上げて、県立図書館の役割を訴えた。そのかいあって、知事が方針転換した。

鎌倉市立図書館の今夏の有名なツイートは10万ツイートに達した。主要なメディアではすべて取り上げられた。このツイートがどうして人々の共感を呼び、話題になったのかを考える必要がある。サードプレイスとしての図書館、簡単にいうと家(ファーストプレイス)と職場(学校)(セカンドプレイス)以外のほっと一息つける場やコミュニティとつながれる場所として図書館が必要とされている。災害対策と同じで日々の積み重ねが大事。日常からいろいろな人を味方につけておくこと。鎌倉市もこのツイートでかなり有名になり、何かあったときは全国からいろいろな支援が集まると思う。

図書館を取り巻く環境は厳しくなっていると思うが、私たちに絶対的に必要なものが図書館だと私は信じているので、どうぞ皆さん、ほんの少しでも良い方向に向かうように頑張っていってほしいと思います。私も陰ながら応援しております。本日はご清聴ありがとうございました。

2-1 分科会報告

分科会名	第1分科会
日時	平成28年11月24日(木)13:00~16:30
会場	県立図書館3階ホール
テーマ	アクティブ・ラーニングを知り、そして考える
開催趣旨	<p>「アクティブ・ラーニング」(AL)は、児童生徒が主体的、能動的に授業に参加する学習法で、次期学習指導要領では小学校から高校まで全教科で導入されることとなります。また図書館は児童・生徒の学びを深めるために、これまで以上にさまざまな支援を求められることとなります。</p> <p>この分科会では、まず共愛学園前橋国際大学の後藤先生にALとは何かについて、従来の調べ学習との違いや大学図書館での取り組みをご講演いただき、続いて群馬県教育委員会高校教育課でALを推進されている指導主事の先生、およびALの実践校である群馬県立館林女子高等学校の先生からお話を伺います。そのうえで、ALの展開に図書館がどのような役割を果たしていけるのか、またどのような課題があるのかをグループに分かれて話し合い、各種図書館が協働して支援を行うための効果的な方策についても考えたいと思います。</p>
日程・内容	<p>12:30-13:00 受付</p> <p>13:10-14:10 講演 「アクティブ・ラーニングで変わる図書館の役割～学習支援のプラットフォームを目指して～」 後藤さゆり(共愛学園前橋国際大学 副学長)</p> <p>14:10-14:20 質疑応答</p> <p>14:20-14:50 取組説明 「群馬県高校生ステップアップサポート事業について」 毒島章(群馬県教育委員会高校教育課 指導主事)</p> <p>14:50-15:20 事例報告 「探究型学習における学校図書館の活用」 赤井恵美子(群馬県立館林女子高等学校 教諭)</p> <p>15:20-15:30 質疑応答</p> <p>15:30-15:40 休憩</p> <p>15:40-16:10 グループディスカッション</p> <p>16:10-16:25 各グループ報告</p>
参加者状況	合計 36人(一般参加者 18人、発表者 3人、スタッフ 15人)
係分担	<p>進行:市村(県立)</p> <p>趣旨説明:東間(松井田高)</p> <p>講師紹介:橋爪(県立)</p> <p>受付:小林(沼田)、内田(利根商)</p> <p>記録:飯島(新田暁)、神保(高崎)、真庭(渋川)、堤(高健大)</p> <p>写真:瀧澤(藤岡)</p> <p>会場:斉藤(新田暁)、井ノ口(高健大)、橋爪(県立)</p> <p>接待:板垣(吉井高)、浅川(高東高)、山本(県立)</p> <p>資料印刷・照明等:市村(県立)他</p>
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> ・アクティブラーニングで変わる図書館の役割～学習支援のプラットフォームを目指して～ ・群馬県高校生ステップアップサポート事業について ・探究型学習における学校図書館の活用 ・アンケート用紙
評価 反省 その他	<ul style="list-style-type: none"> ・各講師の実践事例がとてわかりやすかった、アクティブラーニングの目的などについて司書が学ぶ機会になった、グループディスカッションではそれぞれの立場からの話が聞け大変参考になった等、アンケートでも好評をいただいた。 ・授業のねらいを知るため教員との連携が必要、教員の発問が変わると生徒が自分の言葉で答えるようになる、そのための支援を検討する必要がある、などの気付きや対応策が聞かれ、言葉が先行している感のあるアクティブラーニングについて、図書館として実践的に考える機会になった。 ・小中学校や公共図書館関係者への訴求力に課題があった。

学力三要素の中でも、何を理解しているか、何ができるかという知識・技能は、テストで測ることができた。ところが、知っているだけではなかなか活用されない、覚えただけでそれがどういう意味があるのか、どういう社会とのつながりがあるのか、発展していかない。知識、技能を使って何に活用できるか、ということが今求められている。能力といわれている中身そのものが変わってきているのだ。具体的には、知識を問うテストでは、それを単に知っているだけなのか、それとも活用して使えるのかは、正解しただけではわからない。活用できる知識の習得を実現するのが、アクティブ・ラーニングである。



アクティブ・ラーニングの三要素は、「主体的」で「対話的」で「深い」学びである。深い学びと主体的な学びは切っても切れないものである。自分の関心と授業で聞いていることが結びついているときは次々に疑問がわいてくるものだ。それが主体的な深い学び、ということである。今やっていることはどういう意味があるのか、という視点を持ちながら学習していくことが大切である。そのためには、単元が終わった時にこの学びはどういう意味があったのか、もう一度自分の頭の中を整理しなおす、つまり、単元で学んだ知識を自分はどう理解してどう考えたのか、その学習成果を蓄積してまとめたものがポートフォリオである。また、対話的な学びというのは、教師から説明を聞くだけでなく、説明を聞いて理解できないところをお互いに教えあったり、異なる意見を聞きあって多角的に理解したりする、ということである。この三つが実現してアクティブ・ラーニングという。グループワークだけをしていればいいわけではなく、どういう社会で生きていきたいか、どういう自分になっていきたいか、という主体的なところと深く結びついていなければいけない。

図書館が、アクティブ・ラーニングとどのように絡み合ってくるか、というと、図書館にある資料を活用する、という点においても変化してくる。例えば、ただ調べ学習をさせて子供が答えを見つけるだけでなく、そこから得た情報をもとに思考して子供が答えを生み出すことが大切である。つまり、主体的・対話的で深い学びを引き出す「問い」が重要となる。そうすると、おのずと発問の仕方一つで、目次の使い方を覚えるなど、発展した資料の使い方ができるようになる。よって、子どもの主体的で深い学びにふさわしい「問い」を教員が設定するために図書館がどう協力できるか、議論しながら教育を考えていくことが大切になってくる。また、公立の図書館と学校図書館が連携するのは、なかなか難しい、という意見があるが、地域の中の図書館が地域創生を担っていく主体的な市民を育てていく、という目標を達成するためにも連携は必要である。

子供たちの主体的な学びを助けるためには、日常の読書が不可欠である。読書量を増やすための工夫を家庭の責任にするのではなく、保護者や地域を巻き込んで考えていかななくてはならない。

質疑応答

Q：アクティブ・ラーニングの授業で、予習をしてくる、という部分があったが、子供たちが予習をしてこなかった場合、授業が成り立たないのではないかと。また、知識の獲得を授業外でやる面白い手法があったら、お教えいただきたい。

A：分かりやすい方法では、例えば、予習用に配信している動画を見てきなさいとか、本当にやってきているか事前テストを必ず実施するとか、教員が把握しているところを明確にすれば、やってくるのではないかと。やってこなければいけないのだ、という意識付けが必要。

Q:アクティブ・ラーニングの小学生の事例について、学校図書館で補助をして、自発的に子供が目次の存在を知るといことは、なかなか難しい。これは自発的なのか、ある程度指導があったのか、教えていただきたい。

A:本が常に身近にある学校であった。ゆえに、本の目次を見れば自分の知りたい情報が見つかる、と日々の学びの中で身に付けたのではないか。

取組説明「群馬県高校生ステップアップサポート事業について」

群馬県教育委員会高校教育課 指導主事 毒島 章

日本を取り巻く社会は、グローバル化や情報化が加速度的に進展している。こうした中、新たな知識が次々と生み出され、今までの価値観や考え方を変え、幅広い知識と柔軟に考える力に基づきながら判断することが求められる状況となっており、そのための資質や能力が必要となってきた。

このような急激な社会的変化の中で、国としても、子供たちが未来の創り手となるために必要な知識や力を確実に備えるための学校教育が必要と考えている。育成すべき資質・能力の三つの柱として「学びを人生や社会に生かそうとするための、学びに向かう力・人間性の涵養」「生きて働く知識や技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力等の育成」を挙げ、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習、いわゆるアクティブ・ラーニングを通じて、思考力・判断力・表現力の育成を意識しながら授業を進めることを求めている。

従前の授業は知識を授けることに重点が置かれていたが、知識をベースにしながらも生徒たちが主体的に学習活動に取り組み、そこから学びを得られるような授業に変えるという視点で高校生ステップアップサポート事業がスタートしている。生涯にわたって学び続ける意欲を持ち、多種多様な分野の人と協働しながら、新しい時代を切り開いていくことができる人材を育成したいと考えている。今年度よりステップアップサポート推進研究員の先生を指名し、生徒の主体的・協働的・対話的授業に取り組み、各学校の実態に合わせたテーマを設定し、研究に取り組んでいただいている。

これからの授業では、生徒自身が社会的な課題を設定し、その解決に向けた学習を通して、知を再構成していく学習過程が重要となる。「主体的な学び」と「対話的な学び」そして「深い学び」の3つのアクティブ・ラーニング視点から授業改善に取り組むことが求められる。その中で、書籍を通じて先哲の考え方や生き方を学び、自分の考えを広げ深めていくためにも図書館との連携が必要となる。調べ学習を行っている学校からは、図書館と授業が連携しないと生徒が効率よく学習を進められない、という声もある。生徒による探究的な学習の場として、また生徒が主体的に探究していくことを助ける教材等の提供の場として、学校や地域の図書館が大きな役割を担うものと思う。

今後は、基礎・基本の学習内容を習得し、習得した学習内容を活用し、生徒自身が設定した課題を探究していくことが高校の授業のベースとなり、次期学習指導要領の内容はこの方向となるはずである。図書館との連携においては、司書の先生から現場の先生にもっともっと情報を発信し、図書館の財産を学校と共有できるよう、よりよい関係を構築していく必要があると考えている。



群馬県立館林女子高等学校（以下、本校）は、来年度創立百周年を迎える普通科女子高校である。学校全体でアクティブ・ラーニングに取り組んでいる。学校図書館では、7校合同読書会やビブリオバトルを実施したりしている。図書館を、学習の場として、どう生徒に利用してもらうかが課題だ。図書館では様々な取組をしているが、進路指導の一環として「コラム学習」を行っている。面接や小論文対策として教員が新聞記事を選び全校生徒に向けて朝学習の準備をする。生徒は記事を読み取り自分の意見等を書き込む。この「コラム学習」に役立つよう、司書が新聞記事（毎日・読売）のSDI（索引）を作成するなど、協力している。



本校は、文部科学省により、平成28・29年度の「教育課程研究指定校」（家庭【共通教科】）に指定された。研究主題は「思考力・判断力・表現力の育成を目指したゼミ形式による指導方法の研究」である。家庭基礎2単位＝年間70時間中、20時間をこの研究に充てた。20時間の内訳は、各学期6時間＝18時間と、発表会の合計となる。探究ゼミHE（Home Economics）は、①探究学習（フィールドワーク）、②プレゼンテーション準備、③グループセッション、④レポート作成、⑤発表準備、⑥クラス発表の順に進んでいくが、グループセッションや個別指導の段階で、コンピューター室と併用する形で学校図書館を利用した。図書館には新聞・書物があるほか、インターネットも閲覧できるので、アクティブ・ラーニングの場にはふさわしい。

当初は、最初に授業を受けたクラスの生徒が、学習に使える図書館資料を全て借りてしまい、別のクラスの生徒が資料を利用できないという弊害も発生したが、司書に相談したところ、関係書籍は帯出禁止とした上で「HE探究ゼミコーナー」を設置してくれた。また、先に述べた新聞記事のSDIを生徒向けにし、図書館外に貼り出すなどの工夫もしてくれた。これらの工夫により、生徒が図書館に慣れ、司書に本の場所を尋ねることができるようになっただけでなく、自力で必要とする本を見つけることができるようになった。

学校図書館というのは配置的に校舎の端にあるなど、生徒が通い難い環境にあることが多く、「学習・読書するだけ」のイメージがあるが、ラーニング・コモンズのような形で、グループセッションに使える新しい空間があってもいいと思う。そして、この事例のように、図書館から生徒への働きかけは、図書館だより等の書類に止まらない方法も必要だと思う。

質疑応答：

Q：司書教諭の専任について。司書教諭が他業務と兼任で、本来の職務に集中できていない。文部科学省も専任配置について積極的でない印象があるが。

A（毒島）：学校人事課の担当であり、学校の人件費等の兼ね合いもあるので、答えるのは難しい。ただ、学校訪問で現場を視察すると、専任の司書教諭がいる学校の方が生徒を図書館に引き込む力が強いし、活性化する。専任の司書教諭が良いと思う。

Q：探究ゼミの進捗課程で、授業時間以外に生徒が自主的にどの程度図書館を利用しているか。

A（赤井）：生徒や課題の進捗状況によってそれぞれ違うが、探究ゼミは必ずしも結論や成果を出す物ではなく、研究して学ぶ方法を身につけるなど、その課程を重視するものなので、放課後の時間を使って図書館で課題に取り組む生徒は少ない。

グループディスカッション・各グループ報告

後藤さゆり氏、毒島章氏、赤井恵美子氏にそれぞれご講演いただいた内容を踏まえ、①「アクティブ・ラーニングについて気がついたこと」、②「今後、現場で実践していきたいこと」についてグループディスカッションを行い、下記の通り報告があった。



①アクティブ・ラーニングについて気がついたこと

- ・利用者が具体的に何を求めているのか詳しく聞き取らないと図書館側としてもサポートできない。質問の内容に対してテーマを細かく言ってもらった方が最終的に進むべき方向が詳しく分かるのではないかと、踏み込んでというのが大事である。
- ・アクティブ・ラーニングは、ゆとり教育が従来行おうとしていたことなのではないか。
- ・アクティブ・ラーニングは、今後の子どもたちにとって、大事な手法なのではないか。そうすると教員の発する問いの質が左右するので、図書館としてサポートしていきたい。
- ・他人の発表を聞くということが、結構大変なことなのではないか。
- ・既にアクティブ・ラーニングを行っている学校があるが、能動的に動ける生徒がいない、アクティブ・ラーニングが困難な生徒もいるというのが実情である。
- ・公共図書館としてはどうサポートしていけばいいのかわからない。学校図書館側も公共図書館にどう働きかけたらよいか、やりにくさを感じることもあり立場上の溝を感じる。
- ・調べ学習や課題研究で学校図書館が活用されているが、授業直前の申し出や図書館の利用の仕方や提供できるサービスなど事前に伝えているにもかかわらず、それが定着せず突然の利用に困っている、課題だ。

②今後、現場で実践していきたいこと

- ・利用者が求めている事というのはコミュニケーションを取らないと必要な資料が提供できない。また、教員の図書館に対する希望を聞くなどコミュニケーションが大事。
- ・総合的な学習の時間が実際あるので、資料が無ければ公立図書館と繋がり相互貸借をお願いしたい。資料面での提案ができるのではないかと。
- ・公立図書館としても学校図書館と情報交換をする必要がある。選書に役立つ情報を提供したい。学校図書館からも相互貸借を依頼したい。
- ・学校現場での学校司書と先生方の連携を深める。学校図書館と公共図書館との連携を深めるために、教育委員会を巻き込んで連携を深める。協働することの大切さ、協働するという実践していきたい。
- ・図書館に本を読むスペースとアクティブ・ラーニングのスペースを設けた方が良いのでは。
- ・アイデアに困った時は図書館へという考え方を広めていきたい。
- ・図書館を効率的に利用してもらうために、提供できるサービスを伝えていく必要がある。
- ・学校図書館に無い資料も相互貸借で取り寄せることができるので、そういったサービスも積極的に利用してもらい、充実したアクティブ・ラーニング学習ができるよう協力していきたい。

※最終的に深く学ぶ、対話的に学ぶ、主体的に学ぶという力をつけた子どもたちが出て行くのは世の中・社会である。社会に出たら学校図書館は使えなくなるので公共図書館が支えることになる。大学図書館がラーニング・コモンズという形でいち早く取り組み、指導要領が変わることにより高校・小中学校も変わり、学びの形が変わってくれば学校図書館も当然変わる。公共図書館が支えるべきは生涯学習であり、それが本来の目標・目的である。子どもたちが社会に出てゆくゆくは同じ人達を支えていくという考えを基に、これから連携を探り少しずつ変革をしていく必要がある。

2-2 分科会報告

分科会名	第2分科会
日時	平成28年11月24日(木)13:00~16:30
会場	前橋商工会議所 アイビー
テーマ	図書館の魅力と可能性を伝える—図書館員のためのPR実践講座—
開催趣旨	<p>図書館は住民・学生が疑問や悩みを抱えた時や困った時に、それを解決するための知識や情報を提供する情報拠点としての役割を持っている。最近はそれに加え、地域・学校の中核施設として、「サードプレイス(第三の生活拠点)として場を提供する」「地域振興のため、地域の資源を発掘し図書館資料と結びつけて発信する」「アクティブ・ラーニングの場として活用する」などの新しい取り組みも始まっている。</p> <p>それらのサービスを利活用してもらうためには、図書館の存在と魅力・可能性を、一人でも多くの人に知ってもらう必要があり、そのための戦略のひとつがPRである。</p> <p>第2分科会では、『図書館員のためのPR実践講座 味方づくり戦略入門』(樹村房 2014)の著者 仁上幸治氏を迎え、図書館の持つ魅力と可能性を発信するためのPRの知識と技術を学ぶ。</p>
日程・内容	<p>12:30~13:00 受付</p> <p>13:00~13:05 開会挨拶</p> <p>13:05~14:35 講演 図書館員のためのPR実践講座 ~図書館の魅力と可能性を伝えるために~ 仁上幸治(図書館サービス計画研究所 代表)</p> <p>14:45~16:30 ワークショップ</p>
参加者状況	合計 37人(一般参加者 24人、スタッフ 13人)
係分担	<p>司会:中沢孝之(草津)</p> <p>受付:齋藤朋美(神流)山田陽子(甘楽)六本木真理(県立)</p> <p>記録:福田裕子(群大)吉田久美恵(富岡)俣田さやか(県立)</p> <p>会場:皆川賢一(前橋)武部裕子(上野)青木淳(県立)</p> <p>接待:柘植久美子(群大)田村藍子(県立)</p> <p>調整(写真):関口裕子(県立)</p>
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> ・レジュメ ・配布用参加者名簿(グループ分け入り) ・アンケート用紙
評価 反省 その他	<ul style="list-style-type: none"> ・午前の全体会と別会場の開催のため、荒天の中で移動が大変であったが、ワークショップを行うには適当な広さの会場であった。参加者も昨年に比べ少なかったが、ワークショップでグループ討論をするにはちょうどよい人数であった ・事前課題(アンケート・課題文献)があったため、参加者の意識が高かったように感じる。ただ、準備に手間取り、アンケートの回答期間が短かった上に、周知も徹底できなかったのが残念だった。 ・実践的な内容の講演とワークショップで、参加者に好評であったが、ワークショップの時間が足りないという意見が多かった。講演にしてもグループ討論にしても、内容を深めるためにはもっと時間が必要で、午前全体会、午後分科会という日程全体の見直しも必要ではないかと感じた。

【講演】「図書館のためのPR実践講座－図書館の魅力と可能性を伝えるために－」

図書館サービス計画研究所 代表 仁上 幸治

PRの手段の一つとして、動画を効果的に使うこと。動画は内容が伝わりやすく、話のつかみに効くので、図書館利用教育にも使える。動画の参考図書として『仕事に使える動画術』『1人でできる！3日で完成！事例で学ぶ1分間PR動画ラクラク作成ハンドブック』を紹介する。私は今年、八洲学園大学で「図書館PR実践講座」という公開講座を行っており、そのCM動画を作成した。ともかく作成することが大事である。公開講座等の取り組みにより、現場の図書館員が抱えている悩みの解決を目指している。現場の悩みを集約すると、図書館の認知度が低いこと、認知度があっても利用率が低いこと、そして役所等の親組織内の重要度が低くスタッフの労働条件が悪化していることにある。

私の群馬県での講演は今回で4回目である。講演を行うにあたり、図書館大会のホームページを見てみた。過去4年分の報告書が掲載されていたのはよいが、参加者の声（アンケート結果）に点数評価がない。数値評価をすることにより、昨年との比較や他地区の研修との比較が可能になる。参加者アンケートの用紙を改善し、記録を残しておくことが大事である。研修の成果も外部へのアピール材料になるのだから、保存と公開が必要ではないか。



本日のテーマは「魅力と可能性を伝える」であるが事前アンケートの結果、名刺を持たない人が3割いた。名刺もアピールの手段であり、広報のためにも所持した方が有効である。事前アンケートに回答することで現状を分析し、課題や問題点が見えてきたのではないかと。すべての課題にお答えすることはできないので、図書館サービス計画研究所主催のデザイン力向上ワークショップ等、他の研修を参考にしてほしい。今日はPRの視点からの解決策にしばり、名刺と先進事例について具体的にお話する。

ところでPR以前に、印刷物や館内表示等のデザインや表現・言葉づかい、用語・名称といった点にも問題があるのを見受けるので気を付けたい。

さて名刺について、先程の事前アンケートによると名刺を持っていない人があまりにも多かったが、自分をどうやって覚えてもらうのか。名刺は作りましょう。名刺デザインのダメなところは、字体が教科書体でメールアドレスを入れていない正統派古典型。陳腐なイメージである。また、ロゴマークやレイアウトの揺れにより、同じ組織なのに印象がバラバラなところがある。統一したテンプレートを使っている館は経営もしっかりしている印象を受ける。姓名英語表記では、名字が小文字だとどちらが姓名かわからない。

事例を見せてほしいという声が多かったので、先進的な事例をいくつか紹介しておく。

- ・入口に意外な特色を印象づける例として、草津町立温泉図書館の「温泉暖簾」。暖簾がいい。そんなにお金もかからないし、親しまれる印象である。
- ・図書館員は「禁止」が好きであると思われるが、今、飲食禁止が揺らいでおり、だんだん解禁に向かっている。その例として、名古屋の鶴舞中央図書館は、館内にラーメン屋がある。愛知県図書館にも同様の店が入っている。また、清須市立図書館では地元のビール工場と連携して「ビールの楽しみ方講座」を企画。
- ・一等地に立地している例として、青森県つがる市立図書館がイオンモール内にオープンした。

また、南魚沼市図書館は六日町駅前徒歩10メートルに立地。リノベ物件で地元出身デザイナーが設計した。

- ・ネーミングライツを売る例として、秋田市立図書館は、ネーミングライツパートナーを公募し、銀行の名前「ほくとライブラリー」になっている。
- ・ホテルが図書館を活用した例として、熱海の星野リゾートが最上階にブックス&カフェをつくった。図書館を置くことが集客につながるという判断である。図書館の価値をわかっているということ。
- ・デパート書店、STORY STORY新宿店は雑貨と一緒に本を置いてランチをしながら本を読める。
- ・学校図書館の例として、長野西高校では「司書ボランティア」を募集して日曜日に図書館を開け地域に開放している。また、神奈川県立田名高校では学校図書館をカフェにしている。NPO法人が運営し、平日の昼休みと放課後を市民に開放している。外部の大人が生徒の悩みに気付いてアドバイスをしたり、就職相談やキャリア相談の場となったりしている。
- ・官能小説朗読会を実施した飛騨市図書館の事例からは、地道なサービス改善を行うことも大事だが、これくらいパンチ力のある企画を出せば、日頃図書館に見向きもしなかった人が注目することがわかる。以上、たくさんの先進的事例を見せたが、とにかく固定観念を捨てて、何でもやってみる、あるものを活用すること。

結論として言いたいことは、失敗を教訓に変えてめげずに何度でも挑戦すること。ジリ貧状況を打開するため、味方を増やさなければいけない。関係再構築という考え方が大事である。たとえば名刺を作る等、とにかく一歩目が大事である。一度にできなくても、部分的段階的にやれば何でもできる。

質疑応答

Q：“図書館”という名称を変えるネーミングはありか？

A：ネーミングの案はいくつか考えられる。一つめは、例えば山中湖情報創造館のように名前自体を変えること。図書館という文言がない。二つめは、キャッチフレーズのようなものをサブネームでつけるというやり方。三つめは、先程お話しした秋田市立のように名前を売ること。

Q：図書館のブランディングで特に気を付けた方がいいことはあるか？

A：いろいろな制約があると思うので、組織の中で上手に合意形成をし、提案して承認をもらうこと。また、地元の専門家とチームを組んで地元の中で盛り上げていくこと。お金がなくてもできることとしては、名刺や入口、掲示物等のロゴマークを統一し、一貫して使用すること。

Q：活動や研修に参加するにはどうしたらいいか。どうやって情報を得るのか？

A：メーリングリストに登録する。ネットワークに入ることが発信したり受信したりするコツである。

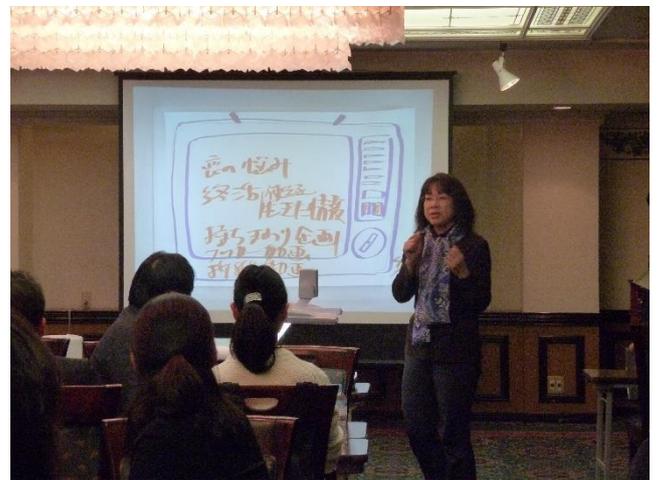
【ワークショップ】

6班に分かれて、「改善案を提案する」をテーマにワークショップを行った。自己紹介により各館の現状を報告しあって共通の課題を確認し、各館支援のアイデアを出す。今回のコンセプトは共同的に何かを行うということ。



発表

- A班：(プロジェクト名) (T)遠い(K)暗い(I)行きにくい
案内板の活用
- B班：(プロジェクト名) 企画実践例データベースの運用
県内の図書館で共有できる書類データベースの作成
- C班：(プロジェクト名) 高校生が図書館をフル活用するために一課題解決の巻一
館種のちがう図書館が連携協力し、高校生の図書館利用のレベルアップを図る方策
- D班：(プロジェクト名) 利用者を増やしたい!!
地元のお店と協力した料理講座の開催等、継続的に図書館へ足を運んでもらう仕組みづくり
- E班：(プロジェクト名) (何処)カラデモ図書館
バスを活用して、中高生を図書館に連れてきてしまおうというプロジェクト
- F班：(プロジェクト名) ワンクリック〇〇!
P Cに不慣れな世代にも図書館HPへアクセスしてもらう方策



まとめ

ワークショップで出た案の中から実現可能なものがあればやってもらいたい。今日はスタート地点の確認までで、どう実現するかは今後である。自館の戦略・戦術を具体化するとよい。また、地区内のグループで取り組むのもよい。今日作ったスライドをデジタル化して活用してもらいたい。

やりっぱなし研修からの脱却というのも今回の研修の裏テーマとして持っていた。今日で終わりにするのではなく、これからどうするかである。PDCAサイクル型応用実践重視研修にしなければならない。そのために、主催者がフォローアッププログラムを作成することを勧める。また、今回の研修を機に、メーリングリストを地元で作りネットワークを作る。その際には、館の公式アドレスではなくプライベートのアドレスを使い、任意のグループでやること。その他、インターネット受講の活用やファシリテーション体験型ワークショップの受講、ライブラリーオブザイヤーにも注目してほしい。

今日は、図書館の認知度をあげるにはということで、既存の考えにとらわれず発想の転換が必要であるというお話をした。斬新なアイデアをどんどん出して企画書にして提案していくのをやったらよいと思う。大胆さが必要である。今日の研修をきっかけに、改善プロジェクトを実施してほしい。

参加者の声（アンケート結果）

図書館大会に参加した方々から、御意見をいただきました。なお、ご意見は紙面の都合で編集してあります。

（1）記念講演について

- ・日本全国の様々な図書館の様子を知ることができ、たいへん参考となった。（同様13人）
- ・「サードプレイスとしての図書館」 数十年前の図書館に通いはじめた頃を思い出しました。
- ・現状維持だったり待っていたりしては何事もいつかは終わりが来るように思います。図書館に限らず。
- ・とりわけ岩手県紫波町のケースは大変に感銘致しました。是非参考にしたいと思います。
- ・人口減少に伴い図書館はこれから生き残るためにますます市民活動支援 学習支援等コミュニティの場であり共感のえられる場所なくてはならないと思いました。
- ・様々な情報を聞いて、図書館も動いていると感じました。
- ・地元の事を考え様々な人から意見を聞いて図書館をつくっていく事がこれから消えない図書館になるかと思いました。

（2）第1分科会について

- ・皆さん色々な気づきを話してもらい大変に参考になりました。
- ・なかなか自分の意見が出ず大変でした(笑) でもグループのみなさんとは楽しく話せてとても有意義な時間でした。
- ・実際に図書館を活用した先生の意見はとても参考になった。
- ・教育委員会の先生のお話がとてもわかりやすかったです。
- ・とても勉強になった。グループでの話し合いについても、それぞれの立場からの話が聞けてよかった。
- ・できない事を言うよりできる事からはじめよう。

（3）第2分科会について

- ・各班の発表を行ったことにより、具体的にイメージできる部分もあったため、業務に活かしていきたいと考えている。
- ・ワークショップもいつもと違ってドキドキしましたが、終わってみるとおもしろかった。
- ・やっちゃんえ！を大切にしたいと思います。やっちゃんえ！は思うことではなく行動することですね。（同様1人）
- ・具体的で度肝を抜くアイデアと意見を学ぶことができました。大変わかりやすく ためになる話ばかりでした。
- ・様々な事例を聞いてさらに今まで考えた事のなかったような視点からの切り口を知る事ができました。
- ・複数の人数で意見やアイデアを出しあい集約するトレーニングが、これからの図書館員には必須と実感しました。

（4）全般（大会全体、記念講演や分科会）について

- ・アクティブラーニングについてとても良く分かりました。一層勉強していきたいと思います。
- ・時間をもっと増やしてもらいたい。
- ・第2分科会は無駄な時間もなくスムーズだったと思う。
- ・部屋のイスがやや高く疲れました。分科会の場所の再考をお願いします。 ※第2分科会参加者
- ・充実した研修でした。

（5）今後取り上げてもらいたい企画（記念講演講師、分科会の講師・テーマなど）

- ・ゲストスピーカーとして片山善博先生を呼んで頂ければ大変に有り難いです。
- ・今回の内容の続編をお願いしたい。
- ・読み聞かせボランティアで表彰されました。ありがとうございました。せっかくの機会だったので他の団体の方との意見交流会、どのような活動をしているのかや工夫している点など聞く時間があると良かったです。発表という大げさな形でなく、出席者のみで話し合いができれば...と思いました。

第14回 群馬県図書館大会 報告書

発行日：平成29年2月

編集・発行：©2017 群馬県図書館協会